

編集後記

いわゆる“単純性盲腸潰瘍”を中心にした14巻6号に続いて、本号では Behçet 腸潰瘍を主題とした特集をお届けする。腸結核、クローン病の特集、そして14巻6号、7号を通覧すれば、回盲部の炎症性病変のわが国における現時点での実態が如実にとらえられ、問題点も浮き彫りにされていてまことに興味深い。いわゆる“単純性潰瘍”と腸型 Behçet との鑑別の困難さは、この企画を通して明らかにされたと思う。

総合評の中で西沢氏によって指摘されているように、われわれはこれらの奇妙な大腸炎症性疾患のスペクトルを完全に把握してはいないどころか、その自然史のほんの一断面しか知らないのである。座談会ではわが国におけるこの道の専門家の人々の考えが明らかにされている。八尾氏の主張するように、1例1例の緻密な経過観察から炎症のスペクトルを探索することが、今後の課題であることに異論の余地はないだろう。この方面の研究はスタートについたばかりである。問題点が明らかになったからには、1例1例を大切に、何年かのちには大腸炎症性疾患の自然史が解明できるよう努力したい。日本のレントゲン、内視鏡の技術と消化器専門家の熱意をもってすれば、これは不可能なことではないと思う。

最後に、6号、7号の企画にあたって症例を提出していただいた諸先生に感謝するとともに、次回の企画にそなえてさらに興味深い症例が集積されることを期待して已まない。

<武藤徹一郎>

<編集> 早期胃癌研究会